

総合人間科学

日本語・日本事情

1 構 成 員

	平成23年3月31日現在
教授	1人
准教授	0人
講師(うち病院籍)	0人 (0人)
助教(うち病院籍)	0人 (0人)
医員	0人
研修医	0人
特別研究員	0人
大学院学生(うち他講座から)	0人 (0人)
研究生	0人
外国人客員研究員	0人
技術職員(教務職員を含む)	0人
その他(技術補佐員等)	0人
合計	1人

2 教員の異動状況

佐藤 清昭(教授) (H3.2.1.～現職)

3 研究業績

数字は小数2位まで。

	平成22年度
(1)原著論文数(うち邦文のもの)	1編 (0編)
そのインパクトファクターの合計	0.00
(2)論文形式のプロシーディングズ数	0編
(3)総説数(うち邦文のもの)	0編 (0編)
そのインパクトファクターの合計	0.00
(4)著書数(うち邦文のもの)	0編 (0編)
(5)症例報告数(うち邦文のもの)	0編 (0編)
そのインパクトファクターの合計	0.00

(1) 原著論文

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Sato K. (2011), Die Erforschung des Konjunktivs bei T. Sekiguchi. - Ein Beispiel der synthetischen Grammatik des Deutschen -. In: 浜松医科大学紀要 一般教育 25, 11-24.

4 特許等の出願状況

	平成22年度
特許取得数(出願中含む)	0件

5 医学研究費取得状況

	平成22年度
(1) 文部科学省科学研究費	0件 (0万円)
(2) 厚生科学研究費	0件 (0万円)
(3) 他政府機関による研究助成	0件 (0万円)
(4) 財団助成金	0件 (0万円)
(5) 受託研究または共同研究	0件 (0万円)
(6) 奨学寄附金その他(民間より)	0件 (0万円)

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0件	0件
(2) シンポジウム発表数	1件	0件
(3) 学会座長回数	1件	0件
(4) 学会開催回数	0件	0件
(5) 学会役員等回数	0件	0件
(6) 一般演題発表数	0件	

(1) 国際学会等開催・参加

1) 国際学会・会議等の開催

佐藤清昭、部会におけるオルガナイザー、第12回国際ゲルマニスト会議 (Internationale Vereinigung für Germanistik, ワルシャワ、ポーランド)、2010年7月30日～同8月7日、部会の参加者約30名。

3) 国際学会・会議等でのシンポジウム発表

佐藤清昭、Die Konjunktivforschung T. Sekiguchis, 第12回国際ゲルマニスト会議 (Internationale Vereinigung für Germanistik, ワルシャワ、ポーランド)、2010年7月31日。

4) 国際学会・会議等での座長

佐藤清昭、第12回国際ゲルマニスト会議 (Internationale Vereinigung für Germanistik, ワルシャワ、ポーランド)、部会座長、部会名：Synthetische Grammatik des Deutschen als einzelsprachliche Grammatik auf universeller Ebene. 2010年7月30日～同8月2日。

8 学術雑誌の編集への貢献

	国内	外国
学術雑誌編集数(レフリー数は除く)	0件	0件

9 共同研究の実施状況

	平成22年度
(1)国際共同研究	1件
(2)国内共同研究	0件
(3)学内共同研究	0件

佐藤清昭, [ベルリン] 東西言語文化研究協会理事長 江沢建之助博士, Europa-Universität "Viadrina" 元教授 Harald Weydt 氏との共同プロジェクト (2010年ワルシャワで開かれた国際ゲルマニスト会議における分科会の構想と実施)

10 産学共同研究

	平成22年度
産学共同研究	0件

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. 関口存男文例集の利用の可能性

関口存男(1894-1958)は、大著「冠詞」(1960/61/62)に代表される数多くの著作論文を通じて、「意味形態論」という独自の言語理論を展開した。「意味形態論」は「統合文法」の観点に立つものである。つまりその基礎には、「言語的に表現しうる普遍的な思考内容」から「各個別言語の文法表現手段」にいたるという言語研究の方向が存在する。関口はこの「統合文法」的研究の方法により、現代言語学において中心的な役割をはたす多くの見地を先取りした業績を残した。関口のこの研究の背後には、彼が30年以上にわたり収集を続けた24,500ページにおよぶ「文例集」の存在があるが、この資料は現在まで注目を浴びることが少なく、またそれが研究者の目に触れた場合でも、積極的に利用されることはなかった。

この資料を詳細に検討することにより、これを他の研究者が有効に利用することが可能であるかどうかを検証する。

(佐藤清昭)

2. 「前置詞論」の執筆

関口存男は前置詞について、ドイツ語をはじめとする10以上の個別言語から用例を集めている。それらの大部分はインパクトの強い名称によって整理された。例えば「激突急停止のin」、「展張限度のan」、「偽装韜晦のunter」などである。しかし関口は、これらの用語やその具体的な用例を系統づけて説明することをしなかった。

これら関口による前置詞の用法に「佐藤による用法と文例」を加え、それらを、近代言語学の研究によって得られた客観的な観点(「上位概念」と「下位概念」)の区別、「意味の

3 レベル」の区別)に基づいて秩序づけるなら、単にドイツ語に限らない「普遍的」観点に基づいた「前置詞論」が生まれることになる。

(佐藤清昭)

3. 「関口存男論」の執筆

池内紀は「ことばの哲学。関口存男のこと」という書を著した(青土社 2010 年)。これは「文学者」、あるいは「文芸評論家」という立場からの関口存男論である。

Eugenio Coseriu のもとで近代言語学を研究してきた佐藤は、「言語学者」の立場からの関口存男論を書き、日本の言語学会における啓蒙的な役割を果たすことを目的とする。

(佐藤清昭)

14 研究の独創性, 国際性, 継続性, 応用性

関口存男の業績はヨーロッパにおいても知られつつあり、例えば 1995 年以来ドイツで定期的に行われている Ost-West-Kolloquium (東西コロキウム)においても常に中心的なテーマをなしている。

関口の文例集は膨大なものであり、しかも多くの個別言語の例文を含んでいることから、文例集そのものについての調査・検討は、今後も継続されていくだろう。また「前置詞論」の執筆も、佐藤独自による文例の収集、全体の詳細な検討などのために数年を要すると思う。この「前置詞論」の執筆プロジェクトは、将来の「副詞論」ほかのために敷設されたレールとなるであろう。

関口存男の代表的著作のひとつである『独作文教程』は 2008 年に独訳され、出版された (Synthetische Grammatik des Deutschen, ausgehend vom Japanischen, München: iudicium 社)。佐藤はこれに続くものとして、『接続法の詳細』の独訳を計画している。これは、ヨーロッパにおいて関口の業績をより広く知らしめることに通じるであろう。